鷹叢書

三

ヲ多10
ろろ51
ろ

中條流應答之

完

探囊抄

全

門 ヲ 10
號 ヲ
卷

新撰中條流産論之書添

一産の時の窮くる事
一相所くる事
一相所能芸産前後ともに
書くる間分量くる事
一間をよく拵ふまじき事
一胎くる毛おこよりまでくる事
一うちまきのまくそといふ事
一逆ふうちまきの事
一病ある時の事

一鷹を定て見守る事
一所対諸対して鶴に仕掛る様之事
一鶴に仕掛る時弟兄之間の事
一鶴問留の事
一遠捕て鷹を間に懸る支候る事
一鶴を組合之所合を知事
一弐ツか三ツ目捕肩根之事
一押る鶴組合鷹ミツの仕合之事
一組合振の事
一鶴捕者る時押て内へ縁之事
一鳥に劣る振の事
一鶴によるとて鷹によるとて人構る事
一雲雀捕て無る後日鷹を放ての事
一鶴捕の鷹に鷹青鷺の取組に一番用捨事
一鶴捕て後みかる鷹に中る鶴おって鷹を仕る事
一鷹縁間に留る人得の事

肉むらよき者之能くんを記す也

胴形の事

一 おほよそ鷹の胴を見る事第一眼にかゝる也
まなこのうち深くさがりて何にても見ゆるやうに眼ぐろ
黒くしてかぎりて静かなるよし 又黒眼のさき
に赤く燐をうけあるもよくにらみあるも哉
同あさのゆるしにまさる古胴といふなり 又まさり
鵄にゆる鷹なり 又ほるさ鷹之頭なり 増角根
眼よく同しくは角根へよりて射あるのよし 古せい
後鳥ある鳩鷹の剣を見へくれり
同のまへちかきつゝまきの鷹

雀鷂は都て同じ角根の上へ越えてつき事
也てまつ深くかゝる者之と申ゆるか能くの
事なる也 肩に付て腑むりて胴やくの
よく狩ありてよく文字にたるは格好なれ共
なるを能鷹とゆ知るまでに鷹にかさねある事
甚よくして胸へ形のなれはいなあるとも云事なし
射まで同じ縦令に鷹をみんには肩尾共に御座候
く骨も能くなれ共格好なれはあるまじき者之形なれ
やかなし 又我好の鷂共にかさねて鷹をなれは掛ぬ
法をなしさきにもなれは第一後尤もよりみんる
小鷹共者也 是よりして乍去あるこのことなきされ

相撲論ニ應ズル事

一 遠方の相撲ニ應ずる事ハ其家ニ一日ノ逗留ニ限ル

一 時節ニよりて觀ニ來る人多ク出て觀の間ニ乘ニ乘じて賣買ニ事寄せ高直ニ賣付る事有之候ニ付ては其節ニ至り其時ニ應じ取計ひ可申候

一 野ニ小屋掛ケ興行ニ付ては十分ニ取締ニ心を用ひ火の元ニ氣を付ケ可申候

一 興行日數ハ十日ニ限ル事

毛ばやかに屋根ニ上ル事ハ堅ク禁ず可申候

一 興行日數ハ十日ニ限ル事

一 野ニ小屋掛興行ニ付ては十分ニ取締ニ心を用ひ火の元ニ氣を付ケ可申候

一 興行日數ハ十日ニ限ル事

一

一

うちまもるといふ意
秋の人のこと意
まんとなりのこと
唯うちまもこのま
食もいつ〳〵こと
そんしまなん
こまこけうちも
時の事のまく〳〵
時の事の乳房
まもること脾胃
ひと又物や食〳〵

こと脾胃
もつ〳〵意
意思の
ひも此
そこ物
食も能
急ふうち
俗不用
考〳〵甚
よう〳〵常
隆盛

夏

病ある人の吉凶禍福の事
病ある人の吉凶禍福の事必ず
其麻のもとにそうて
も西南方にて
とまもるべし
猶せまるかぎり
の屋にる事
る時
この如
又
つづ
養
ん
生

夏

病ある人の吉凶禍福の事
病ある人の吉凶禍福の事必ず
其麻のもとにそうて
も西南方にて
とまもるべし
猶せまるかぎり
の屋にる事
る時
この如
又
つづ
養
ん
生

出来之間鷹ニよりて秘事有二十ヶ条仕
損して鳥捜ニ〳〵も据を付る是ハ無類也
無る遠き所ニ鷹出時上手ニ〳〵是大事なるや
有ちこの成

一 鶴ニ付獲鳥の事并立廻の事
若鷹の時ハ鶴ニつけ立て〳〵鴨ニ〳〵も一ツ
二ツ据廻して鴨ニよりて鴨ニ〳〵据廻して
ならハ鴨の沼あるを廻〳〵せす時ニ入るなれ
よし 鶴をの時分の又鷹飛ハ〳〵も見之
此羽すして其時ニ放す事も縄ゆる事し
若鷹の中〳〵〳〵つる〳〵鶴ニつけもとき

鴈との事となる迄ハ据斤時ニ〳〵も先鴨をも
移して据替し鳥又鳥ハ数の内にも鷺
数無く据廻のよし 白鷺ハ二寸角の毛て
無る物なれバ合を鳥の羽ハ数まて鷺ニて
鷺を据合ニハ鳥の場にて鷺を据替も成
すに据替を鷺の事 唯青鷺を据廻の鷹
ハ鶴をも安く据て扨は人々なれ共青鷺
をなれ共余ニよる事し餌のつけをさうらて
して 其ニ据鷹ハ鶴ニハ〳〵見て
又斤時ニ〳〵時ニいつれ〳〵ニハ青鷺を据廻
て鷹を放し居し若青鷺ハ〳〵ハ鶴を仕

一 初る鶴ヲ乗ル者ハ二月中旬ヨリ三月中旬迄ニ捕ル
二月三月捕鯨組の事

一 初る鶴ヲ乗ル者ハ二月中旬ヨリ三月中旬迄ニ捕ル
二月三月捕鯨組の事

一 初る鶴ヲ乗ル者ハ二月中旬ヨリ三月中旬迄ニ捕ル
二月三月捕鯨組の事

一 初る鶴ヲ乗ル者ハ二月中旬ヨリ三月中旬迄ニ捕ル
二月三月捕鯨組の事

肩の上なる手を以て左の方へ向て行つゝ拳に
なしさ候て身をよく添て拘居し
鷂に寄て鷹に寄にて拵様事

一 鷹によりて左へつく私る弦歩しよりて
若由もよりてさん飛り攫に寄ものよし少かき
寄にてもよるを以てしるし少くすれば寄る
あり鷂をは又ん拵違ひたるもあれは
とろし通を歩むも滞りなくするを
寄る居りつ端にはよりて居き拳の
覚え猶かつこに寄るに近寄りすぐには拵
余ふ寄る深き大事何る事也 鷂拵
無さしき拘にして人にさ寄を離る拘之
加減 次は所為に有之事也
唯我とこの気事

一 鷂捉たる捉目を鷹捉持事
鷂捉無き鷹を鋳に拵をもつ時 体なる
事多このれ又餌を飼しても事に三度
也飼餌をは又度にも今くし餌のよし当
当つかく大事にてつるつるの木へ餌
ろきを飼むし脚同にのもとする左に出痛
起拘之
鷂捉の鷹に属青鷺の数を拘合に用捨有

一　居替之事

鷂据ある鷹に居青鷺なとに好替事無之詞
敵何る居へし時は青鷺なとは鷂似て力弱
き故なれども粉ある据てみて晩く鷂を捕
ん待出る鳥之鴨ぬ猶鷺なとは一向待小掴
成れども人を捕一つくまで又居無て力強て居
鷹待怪我さする故之鷂据の鷹無之書記
待物なれども是又好替する事をいふ也余
鷂据てこまある鷹にふらて鷂ニ
もて居ずきん様の事

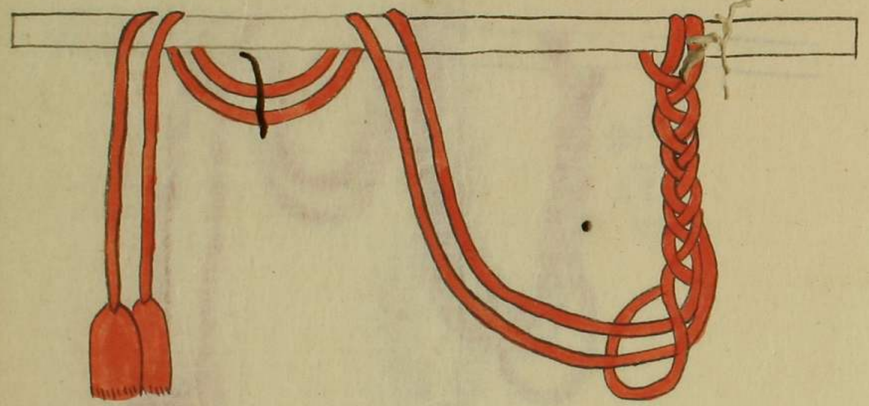
一　鷂据ある鷹の待後据さても事何事も絶え時
何の考も能く初め据時の肉合より又一際
肉を引好替させる為によくよく見て
鷂に晩き離させありて二寸る鷹を取れ
と大方無之もの据あるに寄て鷹遣の人
おこる知識のいれの事也て何す又肉に病有
やしとも大との人又して絶ら二三寸二三寸を
好替据て侍時に鷹に何ぐこ本様ぬ鷂据
人無之るの居ぐ唯据さてこある鷹を餓ぬ
伺れと見て無之事也先其身無てたく
時に入て此の事鴨など粉あく据伺急き
出る分も能くんて越鷹に無情にし人中掴る

一

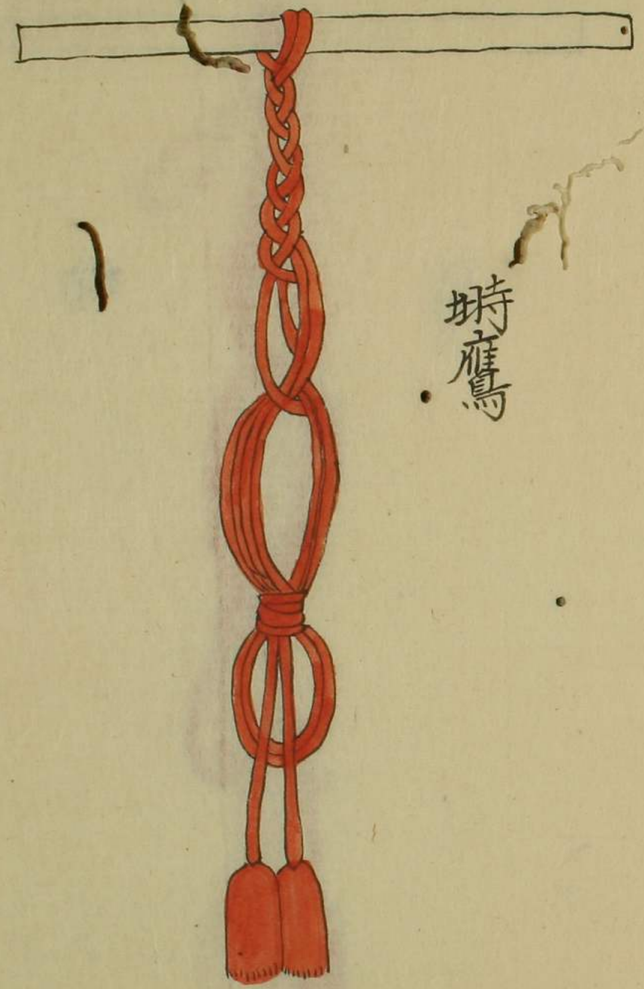
于時享保庚子歲霜月十九日　記

中條惟榮政

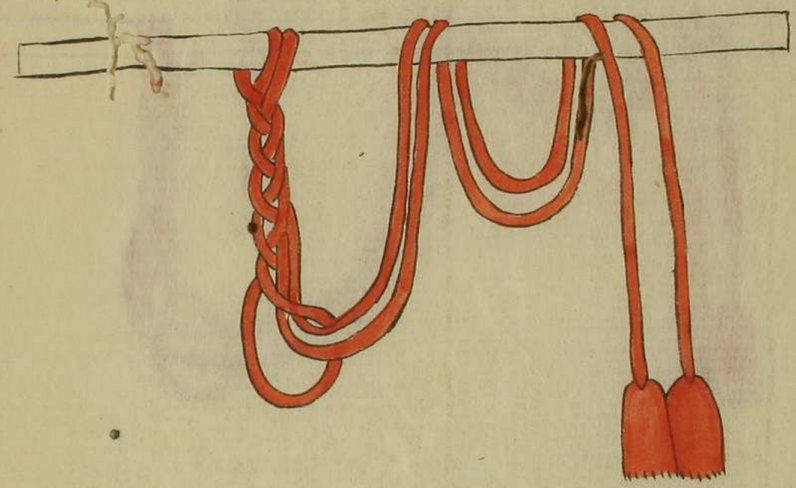
追加拾二架



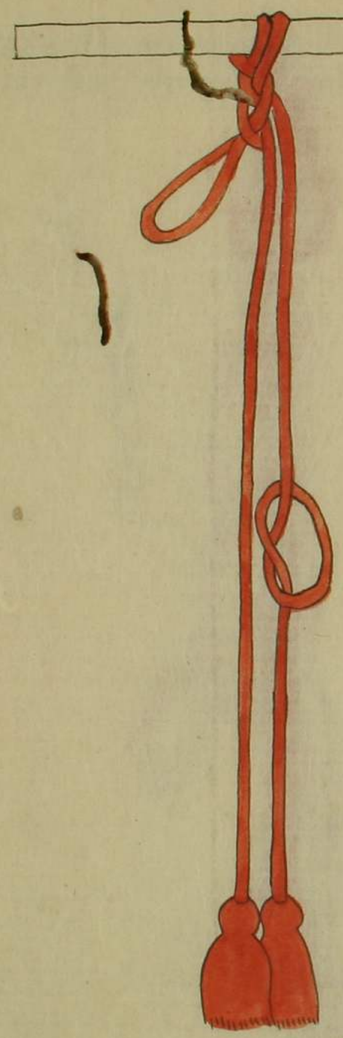
大鷹



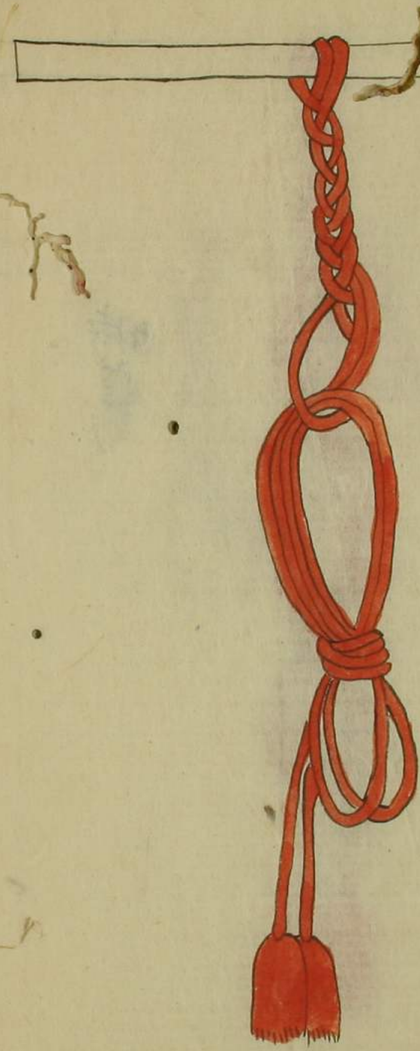
時鷹



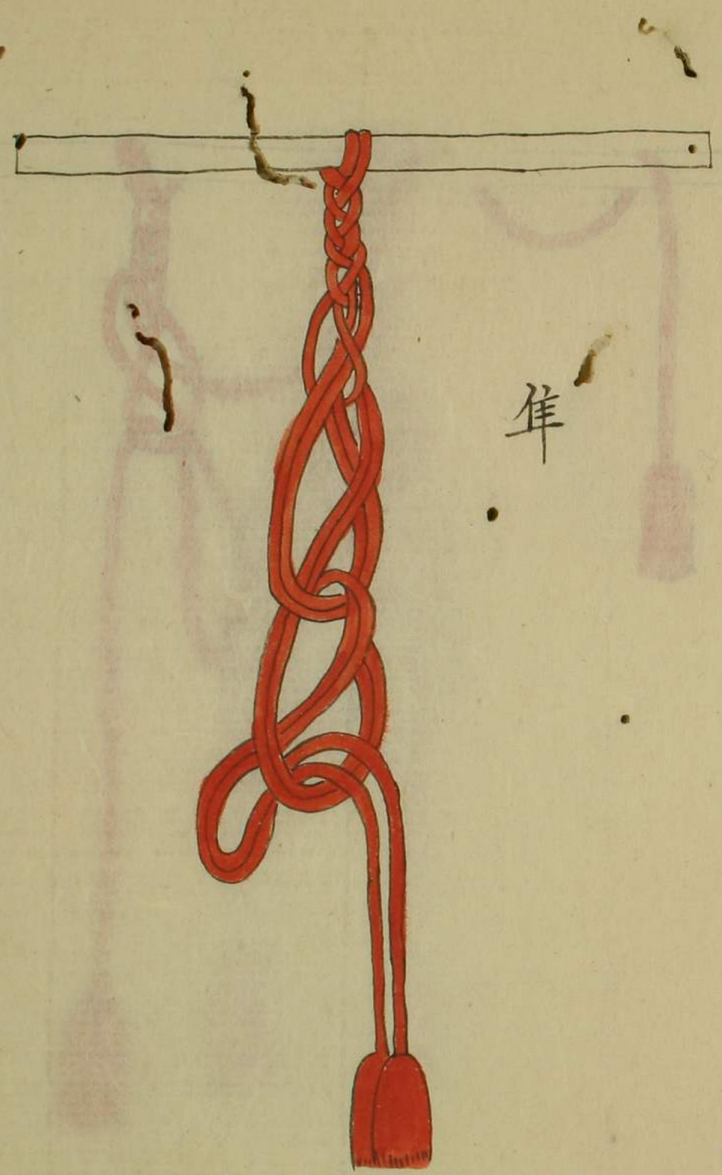
兄鷹



四撰糸

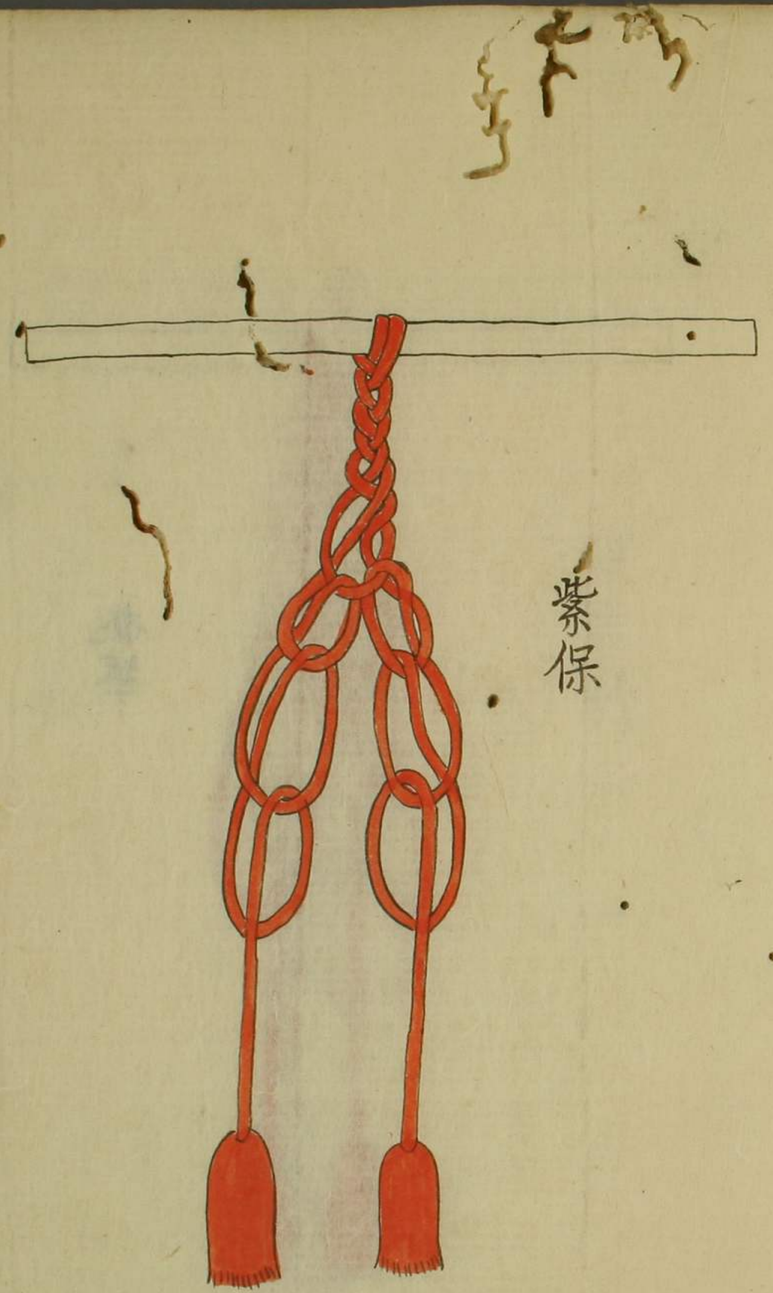


飛鳥

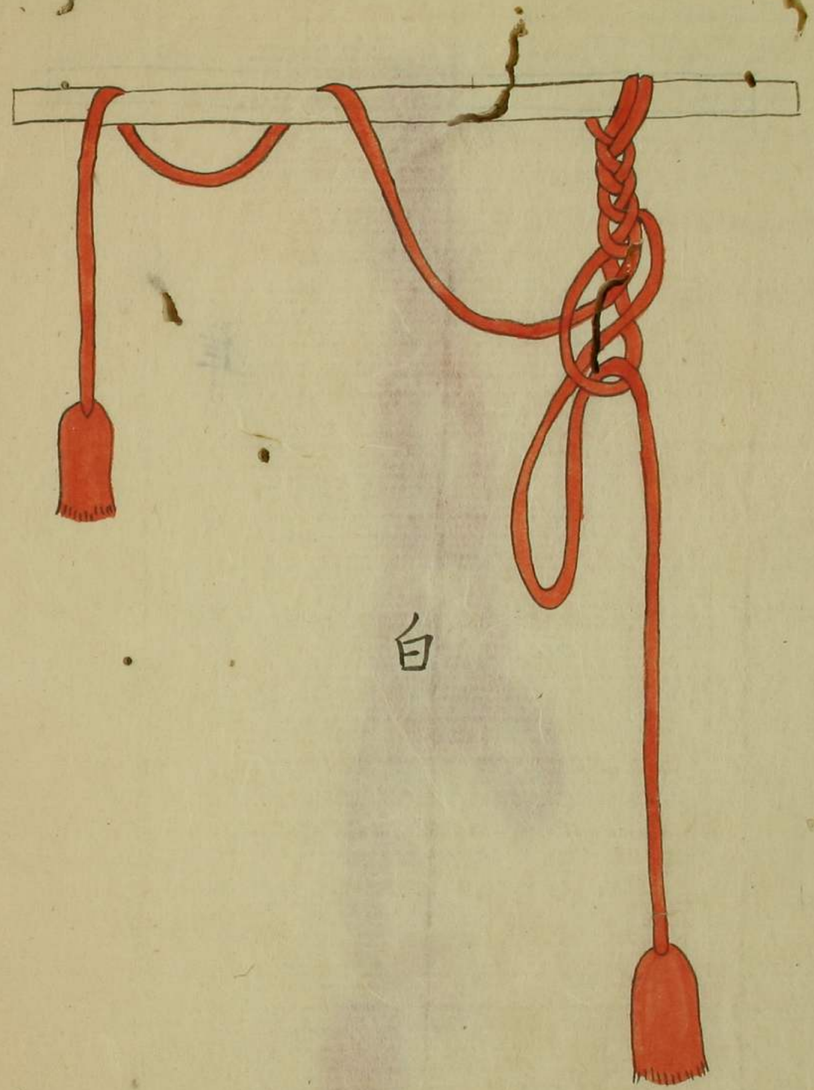


隼

トラリメカ

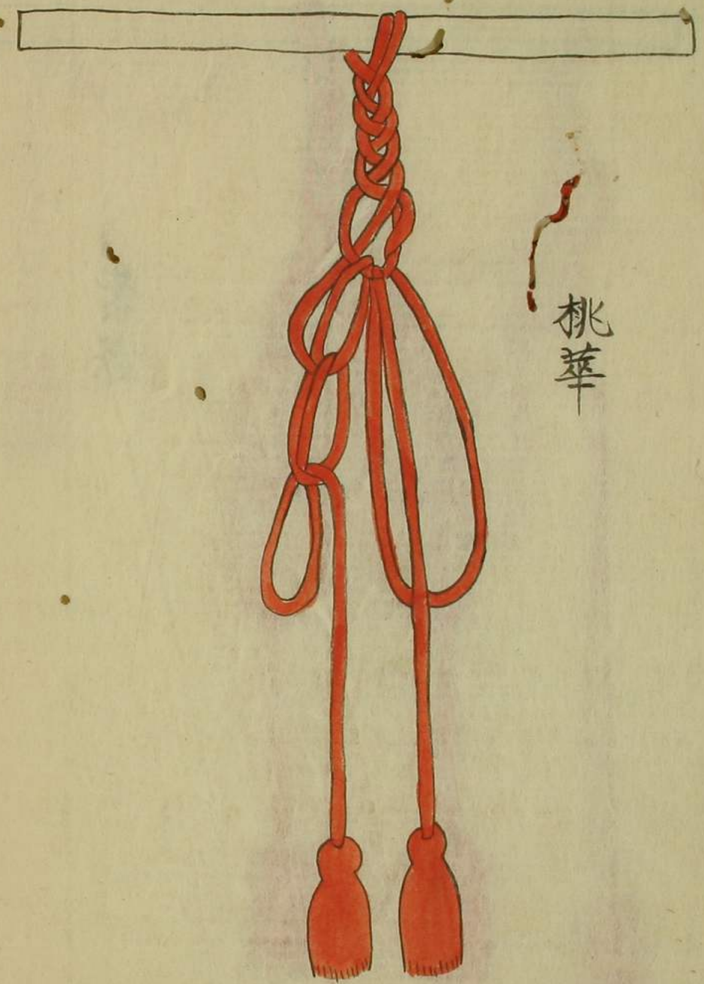


紫保

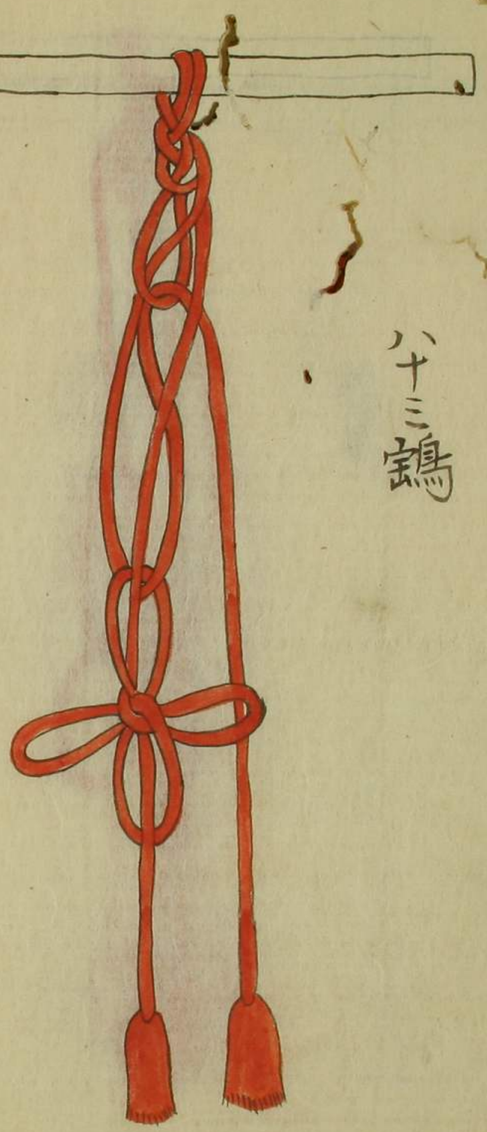


白

君之前



桃華



八十三鷂

右之拾二架者此書ニ付ケ加ニ而有無之然ル
放ケニ可成事ヲ思カ故ニ爲末加書者也

于時寶暦六丙子三月朔日

河合源成賢

門
號
卷

文彦之初ヨリ尋ネ二神功皇后ノ三韓ヲ征伐シ給ヒシ事ヲ
朝日ニ百濟國ヨリ初テ彦ノ御調ニ奉ルヨリ
仁徳天王之御代四拾二甲子天王有右野ニ行幸
ニ至テ彦ヲ放雉ヲ得給ヒ是ヨリ鷹狩之
初ナリ同御代五拾壹成彦百濟池田ニ猿ヲ喰
ヨリ始テ河内國ヨリ養ス天王初テ是ヲ
日本鷹之栄之初也是ヨリ時代雖遠彦
之道專之流ヲ汲サル事ヲ不ト云ヒ不當流之

訓ヶ方世書之通二能考身命ヲナゲ打テ
諸天致ハ守護ヲ収ハシメン事是皆
ナ神佛ヲ心肝深リ信ジ奉リ而之書也

荒脅志ノ訓ル事

一若脅訓ケ初二両親ヲ孝養シ其ノ恩ヲ報ズル事ヲ
孝ヲ大ナルヲ以テ也ト雖モ仏ヲ信ジ奉ラズシテ
地獄ニ堕ヌレバ父母ヲ救ヒ給フ事ナシ百千
万劫ヲ経ルトモ出ル事ナシ然ル故ニ
訓ケ給ヘル利

一三宝ヲ敬ヒ奉リ供養ヲ致ス事ハ一切ノ善ノ根本
ナリ故ニ仏ヲ供養シ奉ル時ハ其ノ功徳ハ

移ス所ニ一夜ノ間ヲ置キ翌夜ノ間ヲ隔テ屋ノ間ヲ
隔テ合夜ノ間ヲ隔テ隣ノ間ヲ隔テ
斉ク間ヲ隔テ
一警衛服ヲ着ケ入リ込ム
況ンヤ他ノ小銃ヲ
以テ小ニシテ
ナク二分ニ
所ニテ
一重ノ間警衛ヲ
一銃ヲ携小銃ヲ
発日数小銃ニ
ツク
ヤ
一重ノ間警衛ヲ
ヲ
一

一 御勘定ヶ初ル時ハ
行司ニ立ル勝ヲ
是ヲ勘定ノ功者
ト云ヒ少ノ事ヲ
ヲ知ル
一 網引ニ着ル
ヲ
志心ヲ
沢引ヶ初ル
巧者ヲ
一 猫ヲ人ノ
前ヲ
巧者ト云ベシ

一振袖の初めて利休振也と云事
春の頃流行していまだ
残る物にて
振袖の事
一
振袖のそもそもなんのため
にてありけるや
一栄寿院ことも流行の振と訓ずるの事
二日三日の間流行ものにて
候と雖も振袖と云名目
候と雖も振袖と云名目
なる事と云の間其九ツ
時を限りと云事狂間と雖も栄寿院人小
刻する処の名目が振袖振と云なれ共
同じそれ成る事にて
御座候哉
一
御座候哉と云ふ事
腰の打ちそこのものしばり
腰の打ちそこのものしばり

一
一
一
一
一
一

右非常之列方今普家之罹厄ル爲リ救恵ノ事ヲ幸ヒ
依テ渇望ノ志深ク今得穫平猶不盡精力ヲ思
念弱歟ノ事理ニ可ラス圖ラ満セラレ若有ニハ急階
間斬者倫同可キ物罪人乃宜ク銘セカ旧ニ收ラ
緩怠之同志有之者ハ日ヲ不可顧仮令如件

鷹之書

門矯巻

一大鷹大備長
一小
宗相田大鷹小ばち
同作之
一小
一鍋なふ弐
一つきの大徳
一名つさいの大徳
一鍋こづち
七尺弐寸
弐尺八寸
三寸六分
三寸弐分
同弐尺
四尺弐寸
三尺弐寸
弐尺八寸
弐寸八分

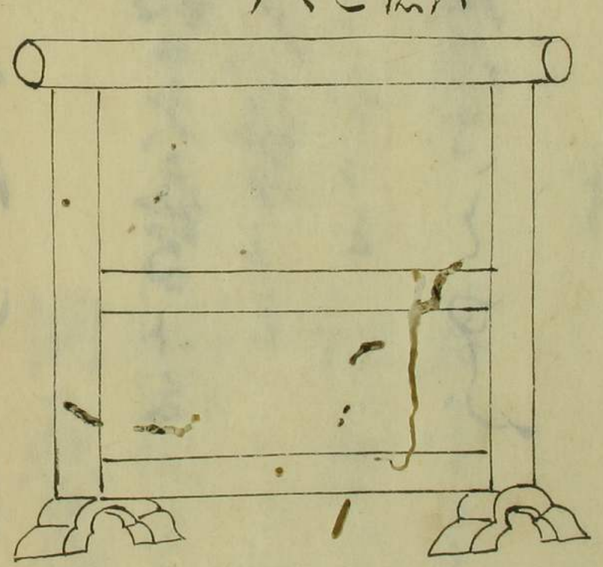
仕立て用の若木を囲い
鷹ごとの名と木立
一 三尺壱寸一尺ノ若木
一 二尺ノ若木
一 小隼
一 鶚ノ若キヲ
一 又鶚ノ
一 つミ名つさいのろいもの若キヲ細掛（アガケ）ト云
細面又鶚ト云
初ノ若ト云

ほさぐミ名つさいとも名はさいとも
和名

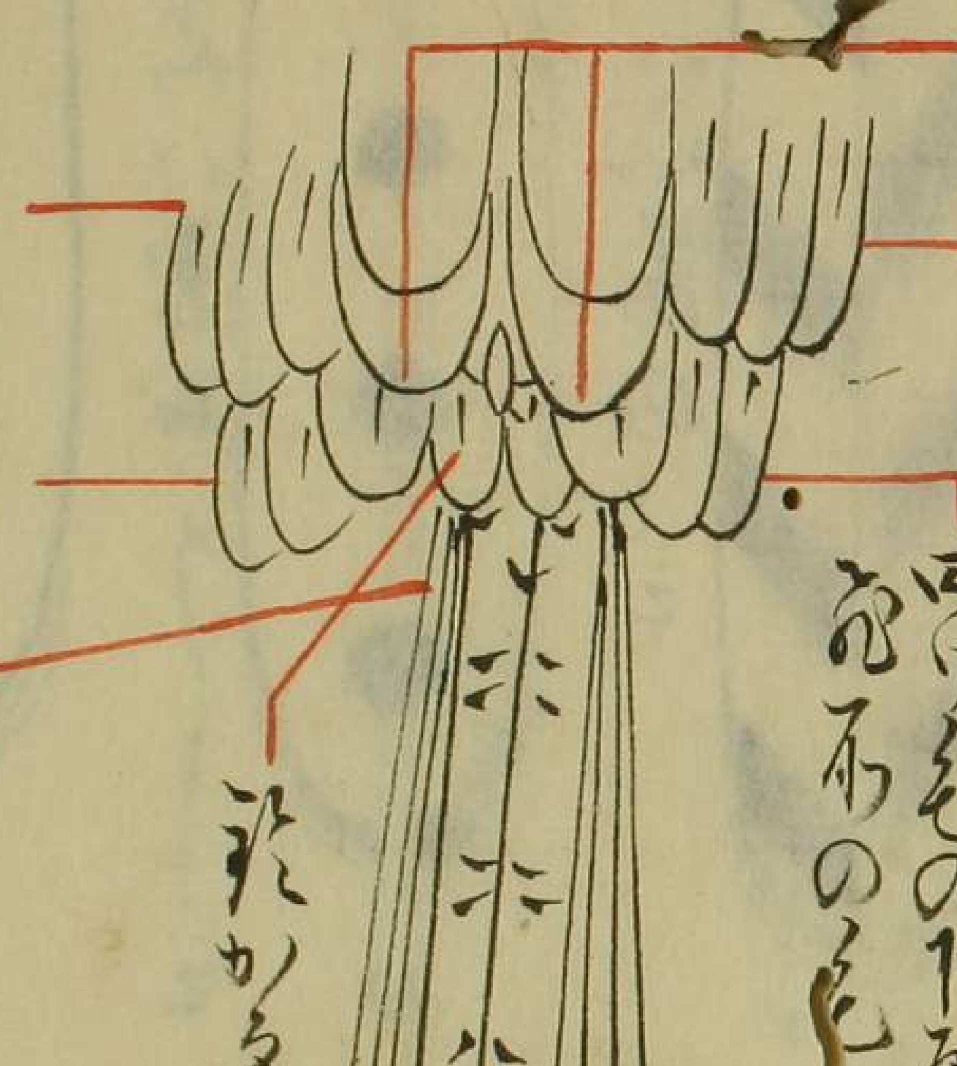
一 大鷹の幼ヲ幼ヲ
一 幼ヲハ幼ヲの大鷹ト云
又ハ鷹中幼ヲと云
一 幼隼或幼ミ鷹ト云

ぶいがこ

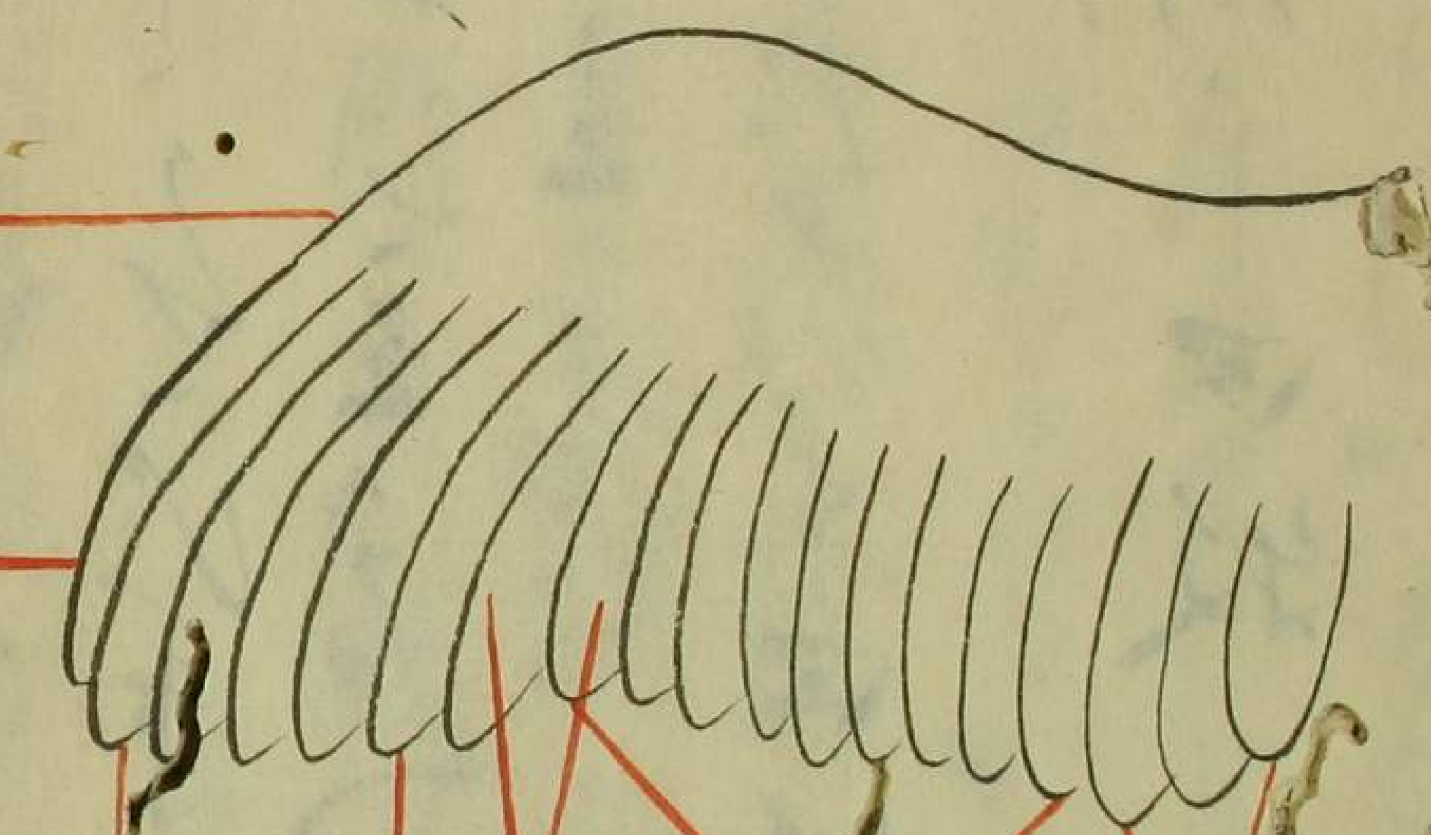
長サ大壱尺小壱尺ほど有之
おうへつぎ大法左右太法
とも好次第ニ仕候ても
よろしくたゞやうすいたし
ぬりくろのきまりう
ハ朱大概ぬり



九ふの肉をおろし骨を抜り三枚
ニ大壱ツ二鮮拾二九ふの肉ハ九ツ
一兄ハ七ツ
一弟ハ五ツ
二兄弟ハ二ツ四ツ
一筆ハ弐鮮九ツ
つゝハ弐ツ四ツ
二ツ足鮮ニ用ル

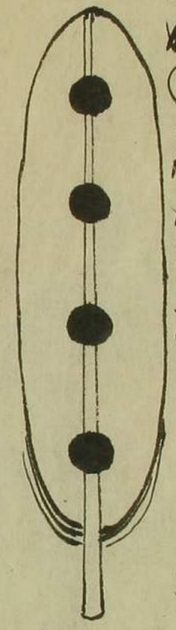


尾ツ毛かろの羽サシより三段下四枚在り
尾ツ毛の尾さけいちんの毛
尾ツ毛の下尾けいちんの毛の方へうり羽と
飛雨の毛
羽かノ毛し
羽出しの下尾の上二枚と山鳥しと
とこ枚をり然ル間切ルし間在ル
若者在り切ル



かろの尻羽と云毛二枚
かろ九枚
ねり肉二枚
無名風切り七枚
折め小まくシノ上
無名風切りト云
二ノ羽
きいそノ羽
き〳〵ノ羽

矢ぬのミゝルノぬの名ねうと云



矢のぬの名いもねうと云

矢のぬの名ハ鏑ぬト云

上尾二枚之上ノ外ニ壹枚ノ尾ツヾルノヲ二シノト云ナリ

此通成者一物也